

あるきたいみちを辿って

xx 年後の移動空間と島田市での暮らし 212053 安井一真



この制作にあたり・・・

大学生になり歩くことが増えた私、車中心の交通体系への疑問、歩くことを好きになってもらいたい

歩行者のためのまちづくりをしたい

concept

島田市という町が歩きたくなる新たな移動空間とこれからをつくる

対象敷地について



対象敷地は静岡県島田市の旧市内に位置し向かいには雄大な大井川が流れている。大井川はかつて暴れ川と恐れられこの地で暮らす人々へ多くの被害をもたらしていた。またこの地は東海道五十三次の島田宿としても知られており、大井川越遺跡と言った歴史的に価値のあるものが残っている。今現在はお茶の町としてお茶の魅力を発信している。



現状と比較



島田市東海道



アメリカ ニューヨーク

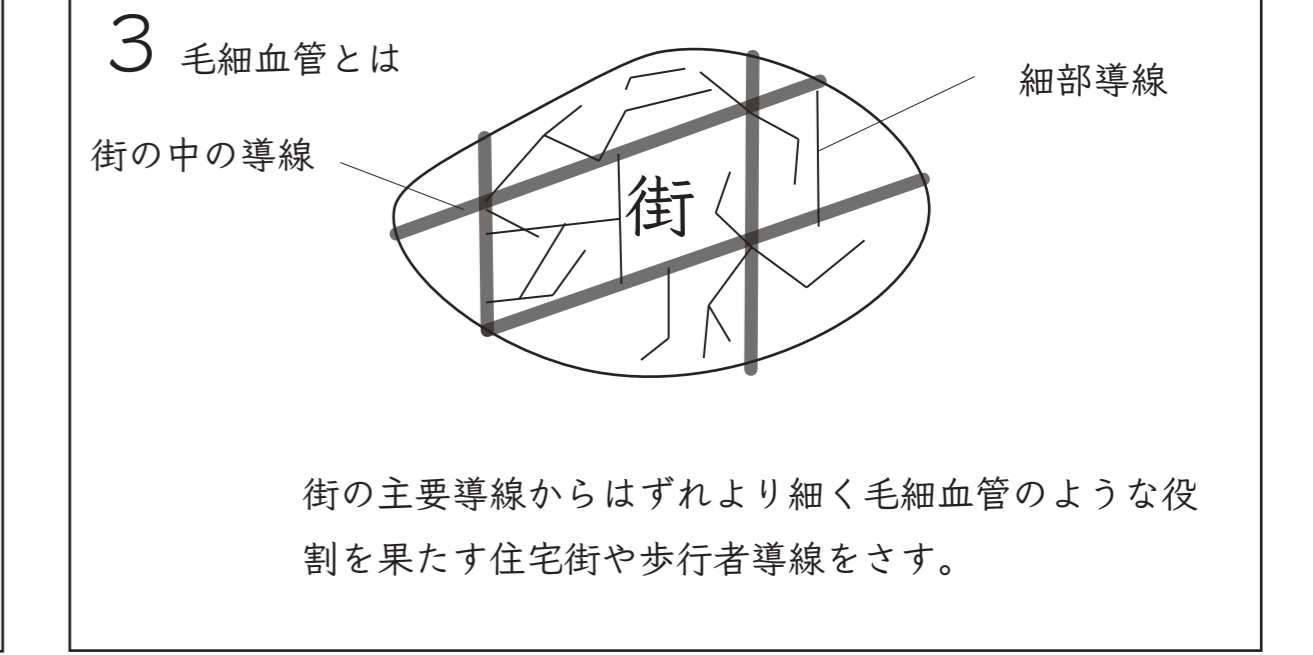
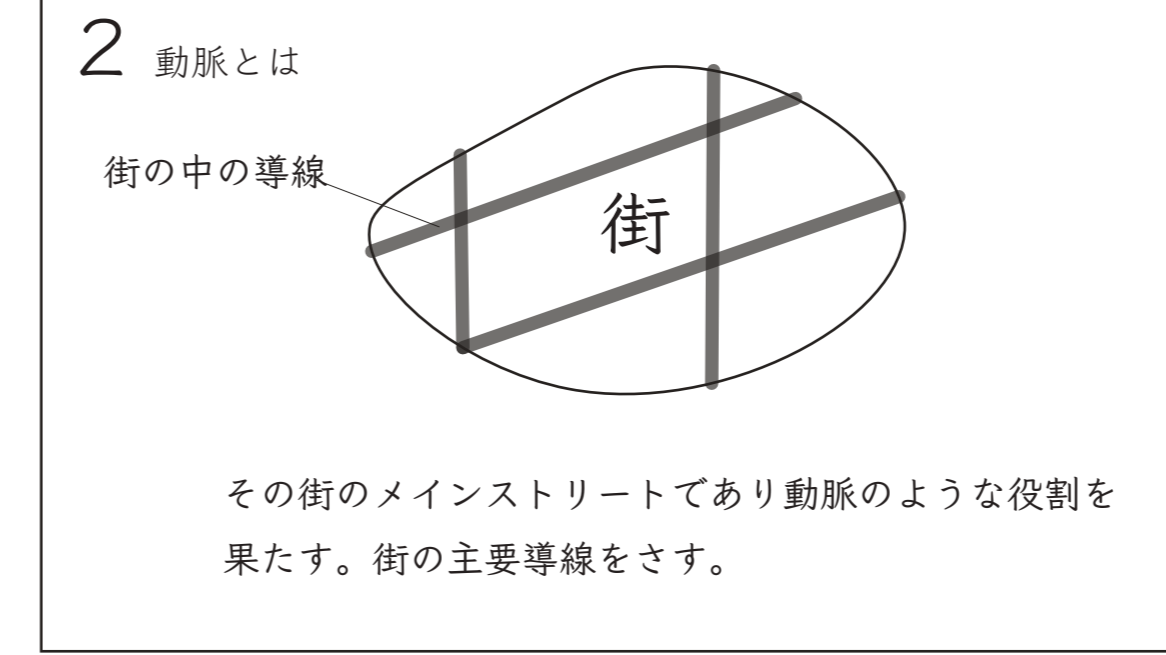
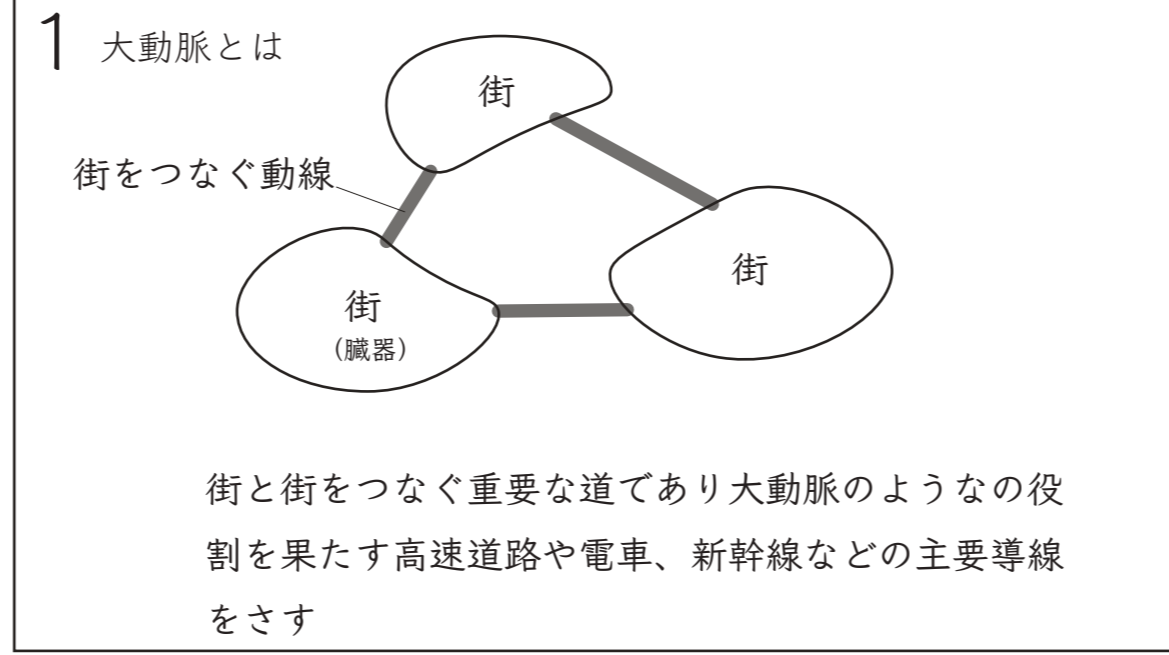
島田市の道は車が通るためには非常に整備されているが歩行空間に関しては必要最低限の空間整備である。それだけでなくアメリカと比較してみると緑の違いが目がいく、アメリカの木々はどれも大きく自然を感じる事ができるのに対し島田の道には緑はほとんどなく電線が目立ち車が通る傍にほそぼそと歩行者のための空間がある。明らかに歩きたいと感じるのは右側だ。そして島田市には緑の増加が必要だと感じる。



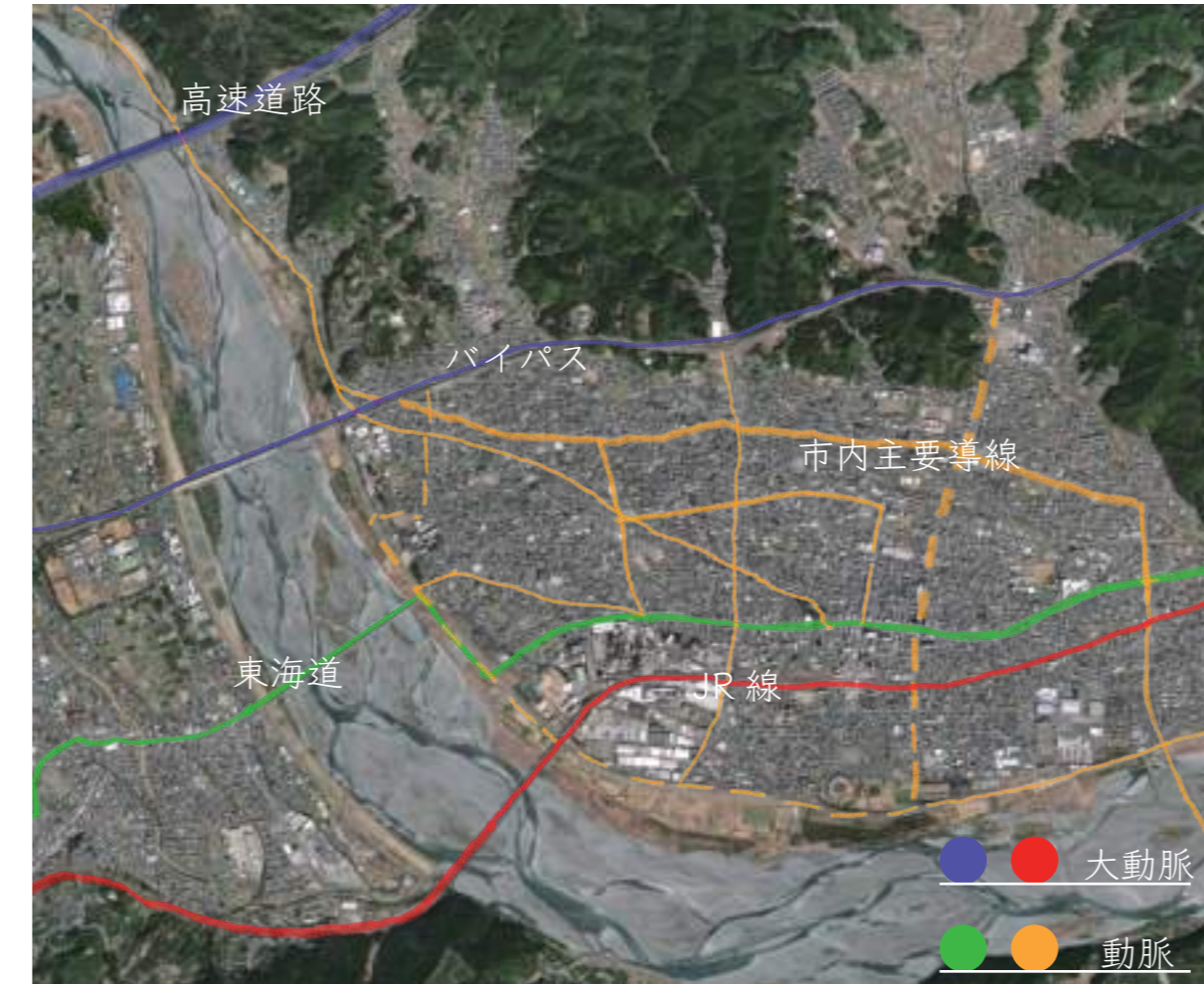
主要道路に比べ住宅街は緑のある空間を確認することができるが、人の視線を遮るための緑であり隔たりに感じてしまうより緑の力が発揮されるような緑地空間が必要であると感じる。

道とは？

道とはある意味『血管』のようなものである



以上のように道は三つのパターンに分けることができる。ここからわかったことは最低でもこの機能を果たすことができないと道は街としての機能を果たすことができないということ、これは人間の体の血液の循環とにており滞っているとその部分は機能しなくなる。次にこれを島田市に落とし込んで考えてみる。



島田市の導線の特徴として、東西軸に広域交通が広がりを見せていることがわかる。その広域交通の一つであるバイパスから点線で伸びる市内主要導線が島田市をぐるりと一周したバイパスへと戻る一つの交通循環もみることができる。

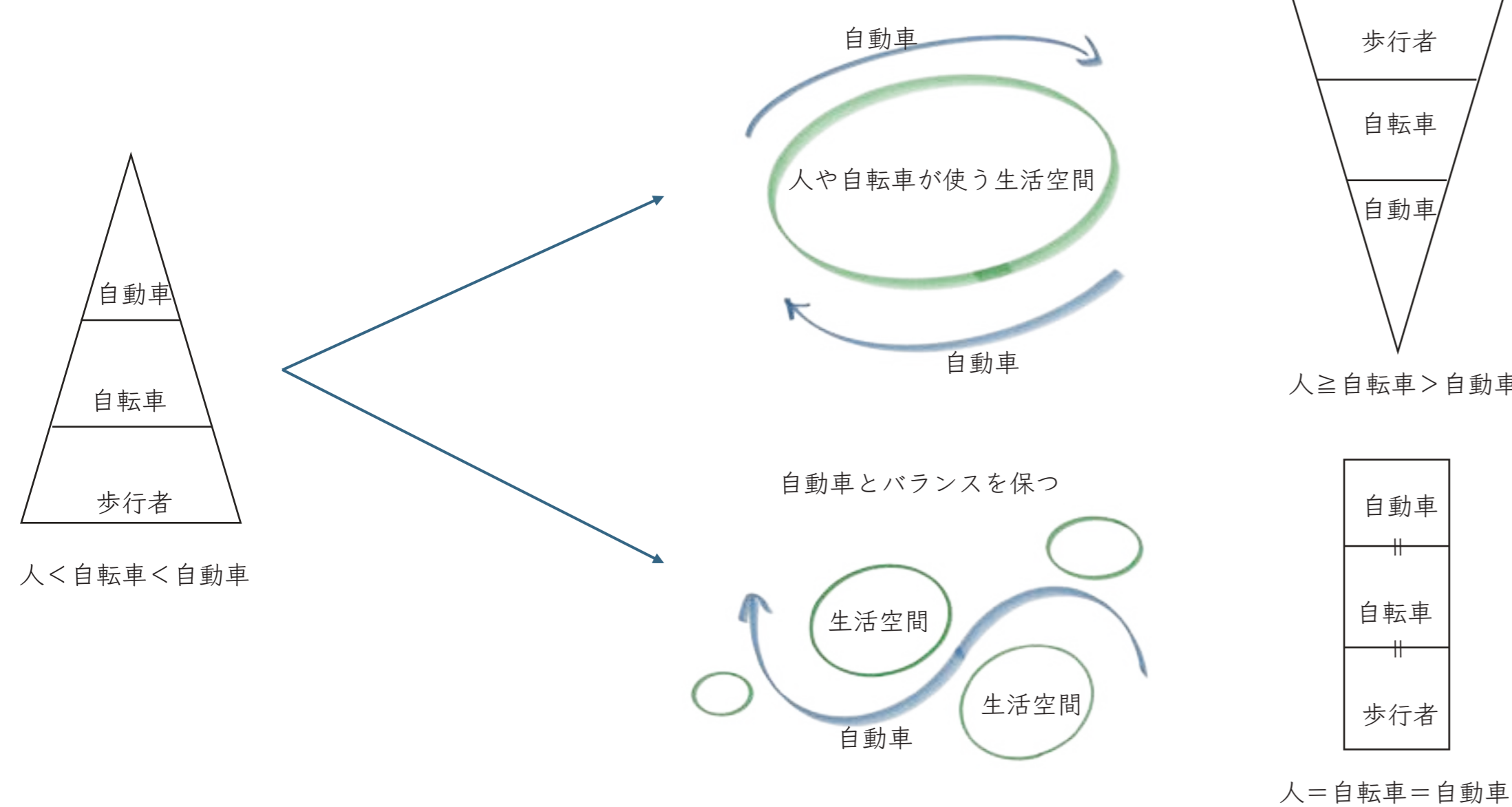
対象敷地の選定



主要道路が周りを囲む左上の地域と交通状況が少ない駅前計画地を限定することにしこの二箇所の土地を計画地として進めることにし、山間部側を郊外型、駅前側を都市型とすることにした。

ヒエラルキーを変える

現在



今回の計画で注目したのがヒエラルキーのあり方である、自動車、自転車、歩行者の今あるヒエラルキーの関係を逆転させる締め出し型、もしくはそれぞれを尊重しあって生まれるバランス型とすることで人が歩きやすくなる歩行空間の創出につながると考えた。

道路の利用可能区域



郊外型は計画範囲のほとんどが人と自転車のみの締め出し方となっていて黄色で記されたところは唯一自動車が入ることができる道路となっている。侵入できる自動車は公共交通のバスのみとなり定期的この区間往復している。

都市型



都市型は白で書かれた中央の場所は自動車のみ侵入できる場所となっている。一方橙色の部分は車の侵入ができることに加え人も同じ空間を使うため共存しながら利用する道路空間となっている。その他は郊外型と同様に人と自転車のみの空間となる。